

ボクは、そもそも、大阪弁で言う「いちびり」なんだが、いま、それで謙遜している。ちょっと長い前置きを聞いて欲しい。それは、JR環状線芦原橋駅西にある能力開発機構が所有する大阪地域職業訓練センター（愛称A'ワーク創造館）存廃問題だ。

ボクは、大阪府からの補助金を貰って「運営」していたこの施設の前の指定出資法人の理事だった。橋下さんが知事になって、この法人の非効率運営が糾され、ボクも理事として責任を感じて、法人の解散に賛同した。そして、この施設を閉鎖するか否かが大阪府と関係者によって話し合われ、ボクは、補助金ゼロで「経営」してくれる民間法人を募ったらどうかと提案し、橋下知事も妙案だと賛成されているとのことで、公募が決まった。しかし、問題は二つあった。一つは、補助金ゼロのうえに、初期投資や運転資金が必要ということ。もう一つは、能力開発機構がガイドラインを畫けて達成できないなら閉鎖すると宣告していることだった。でも、ボクは「いちびって」権数の団体を創って、大阪職業教育協働機構という有限責任事業組合(LLP)を創って公募に立候補した。案の定というか、公募の説明会には有数の企業などが参加したが、採算性がないとみたのか、無投票になった。

それから2年、館長を引き受けてくれた高見一夫君の手腕で、コストは前法人の1/2で、受講者の実費は2倍、



ボクの「いちびり」が招いた職業訓練施設存続の危機

つまり、4倍の効果をあげ、能力開発機構が示した存続のガイドラインも超えて、今日では受講生でこったがえず活況となった。ところが、厚生労働省と能力開発機構は、前言をいとも簡単にひっくり返して「実績如何にかかわらず全国82の地域職業訓練センターすべてを閉鎖する」と通告してきた。3年契約の途中の来年3月末の閉鎖だと言う。「なび」の既号で書いた「クーラー戦争」では機構が折れたが、閉鎖は規定方針通りだと依然強硬だ。ボクの「いちびり」のせいで、高見君には極度の疲労を負わせ、LLPの仲間には不安を抱えさせ、そして、ボクは借財をしょい込んだ。いま、ボクは、あの時の決断は間違っていたのかと自問自答した。賢明な企業は公募から降りたではないか。政治が

流動して官僚は風見鶏になっているのを見抜けなかったのか等々。ただ、ひとつだけ確かなことがある。あの時、ボクが「いちびらなかつたら」、高見君の、あの何事にも動じない胆力がなかったら…この2年はなかった。「なび」読者には懸念が聞いてもらった。ボクのいつもの悔やみごとの繰り返したが、法制度がないと公は動かないし、儲からないと民は動かない。しかし、法制度がなくても、儲からなくても、社会問題は解決しなければならない。やっぱり、がんばろう、それが社会的企業だ。

岡ナイス代表取締役 高田一幸



hidarimakiの  
この逸品  
竜二



監督：川島 透  
音楽：鈴木明夫  
主題歌：萩原健一  
「ララバイ」  
キャスト：金子正次  
永島暎子  
北 公次  
製作：株式会社アトム  
創設：1983年カラー上映  
原簿：松竹映画

金子正次は、鈴木明夫名義で脚本を書き、自主制作映画「竜二」を製作し主演した。しかし、劇場公開から僅か1週間後に病で亡くなってしまった。金子は「竜二」一作で伝説化した俳優であると伝えられる。この映画は、従来のやくざ映画にはなかった与太モンの小市民へのあこがれを描き、家族とひと時の安らぎの後、再び逸脱していく男の遁走劇と見る事が出来る。怖いぐらいの凶暴さと優しさをあわせもつ竜二の病的人間を金子はリアルに演じ、やくざ映画の逸品として残した。ショーケンのやたらカッコをつけた主題歌がぴったりフィットしていた。

竜二は新宿にアジトを持つ三東興業の幹部。賭博やとりたて、金まみれ、女まみれの生活。そんな日常を走り抜けてきた腕利きのやくざだが、彼には別れた妻子がいた。極道に飽き始め、家族への懐かしさから堅気の道を選び、「刺せば監獄、刺されれば地獄」

の稼業から引退を決意する。そして酒屋の配送店員として定職についた彼にとっては、家族との久しぶりの団欒が新鮮で、とりわけ一人娘への思い入れに心を満たす日々が続く。そんな情景を妻である永島があり余る幸福感を表現し、反面、破綻するかも知れない不安な幸せ、そんな不条理を抱えながら竜二に依存する女を演じて魅力だった。

ある夜、シャブ中の落ちぶれ仲間から金をねだられるが、自らの家族を思いその日もらった給料袋には手をつけず彼を見捨ててしまう。このシーンはまさに世間への仲間入りと見えた。だがこれまでしのいできたウラ稼業の収入に比し、今の収入でやれるのか、世間の連中はこんな薄っぺらな収入で我慢し幸福なのかと、疑問を彷徨させていく。元手下の晴れやかさ、小市民のつまらなさ、虚勢だけの元極道のあわれさ、シャブ中男を救えなかった自分。改めて元稼業への懐旧の念を深めていく竜二。

夕刻の商店街。帰宅途中の竜二は買い物をする妻子を見つける。その視線を感じる妻。互いに無言で見つめあう顔のショットが続く。妻は竜二のその表情に兆しを感じ一粒の涙を浮かべる。竜二も目を潤ませ元来た道を引き返していく。一度身に染めた虚飾の世界に戻る竜二。戻らない運命を感じる妻。そして男（虚構）と女（現実）がこの映画の主題となった。落ちていく竜二のどうにもならない性癖とわがままさの表現が見事で、今回改めて見て、寂静（じゃくしょう）感と無常のラストは、家族的小市民性をあざわらい、やはり逸脱してきた僕自身と重なり悲しかった。

hidarimaki

